

# 東アジアにおける現代の 地表プロセスと歴史的環境変動

ここで紹介する国際会議の出発点は2004年に韓国地質資源研究院と金沢大学自然計測応用研究センター（現環日本海域環境研究センター）が韓国・大田市で共催した日韓国際ワークショップ「Present Earth Surface Processes and Historical Environmental Changes in East Asia」である。これは2003年春に開催された21世紀 COEプログラム「環日本海域の環境計測と長期・短期変動予測」（金沢大）主催の国際シンポジウムに韓国地質資源研究院の代表者が参加し、日韓における「地表環境の変動」に関する研究交流の推進を議論したことがきっかけとなった。この国際ワークショップの基本的な目的は、偏西風や東アジアモンスーンの影響を強く受け、気候変動に敏感な東アジア地域において、プロセスと時系列変動の両者の把握が可能な湖沼－流域系を主たる対象に、現在の地表プロセスの解明と歴史的環境変動の知見に関する情報の発信と交流である。日韓国際ワークショップは金沢大学自然計測応用研究センター・金沢大学21世紀 COEプログラムと韓国地質資源研究院が共催し、第2回（2005年、日本・金沢市）、第3回（2006年、韓国・ソウル市）と開催されたが、中国・ロシア・台湾・モンゴルからの研究者も積極的に参加してきた。2007年から主催機関として日本学術会議・地形（IAG）小委員会、中国科学院南京地理湖沼研究所が加わり、名称も日中韓国際ワークショップとなり、第4回（2007年、中国・南京市）、第5回（2008年、日本・函館市）が開催された。

そして、国立台湾大学が主催機関として参加した2009年からは東アジア国際ワークショップという名称となり、2009年9月の末に台北での会議と台南（嘉南大圳）や日月潭（台湾最大の湖沼）を中心とした巡検が行われた。巡検終了後の台北への帰りのバスの中では、偶然にも、嘉南大圳を設計し、嘉南平野を台湾最大の穀倉地帯に変えた八田與一の記録が「台湾演義」という番組で「台湾で一番愛された日本人」として放映されており、巡検の意義の一つが図らずも裏付けられることになり、参加者の共鳴を呼んだ。日本人参加者、とりわけ金沢大学関係者はその先達（八田與一は金沢生まれで旧制四高（金沢大理学部的前身）の卒業生）の残した足跡に改めて強い印象を覚えたようである。この会議開催時は8月初めの台風（台風8号：モーラコット）が台湾南部にもたらした大きな災害が生々しい時期であり、また1999年9月21日に発生し、2500人にも及ぶ犠牲者を出した集集地震10周年とも重なっており、地表変動と防災も重要な課題として取り上げられ、議論された。また、この時、次回は韓国地質資源研究院が主管し、モンゴル科学アカデミー地質資源研究所も主催機関として加わり、2010年10月に韓国の済州島で開催されることが決められた。

本特集では、台湾の会議で取り上げられた課題を中心にこれまで議論されてきたことや関連情報を含めたいくつかの報告を紹介する。